

環境に関わるサウンド・アートの研究 : ジョン・ ケージ以降の思想と実

大塚, 姿子

<https://doi.org/10.15017/1654964>

出版情報 : 九州大学, 2015, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : 全文ファイル公表済

氏 名 : 大塚 姿 子

論 文 名 : 環境に関わるサウンド・アートの研究
—ジョン・ケージ以降の思想と実践

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、20 世紀以降、西洋芸術音楽分野において現われた近代的な「音楽」という範疇から逸脱するような方向性を持つ領域、すなわち新しい音の芸術形態としてのサウンド・アートについて、特に環境に関わる試みを取り上げ、その芸術的、文化的な意義と価値を検証しようとするものである。また、サウンド・アートという領域の多種多様な実践より、環境音、環境という視点に焦点を絞り、西洋芸術音楽史上のケージ以降の系譜に位置づけられる実験的な実践についてその登場と展開のプロセスを素描することを試みるものである。

サウンド・アートは広範囲にわたり外延が曖昧なものであるために、その定義が困難であり、これについて論じること自体が模糊たるものとなる可能性がある。そこでサウンド・アートの発生と展開、成り立ちを明らかにするために検証を行なった結果、デュシャンに端を発するコンセプチュアル・アートを継承するような美術等の視覚芸術からの音へのアプローチによる作品、メディア・アート、あるいは物理工学などの音楽とは異なる分野において、作品制作に伴う副次的な要素としての音がクローズアップされ、サウンド・アートとして成立していることが確認された。

その一方で、西洋芸術音楽における環境音の使用、あるいは環境への視点を持つ動向の延長線上にあるサウンド・アートが確認された。ケージの楽音を主体に構成された音楽という枠組みに日常的な音を取り入れ楽音と非楽音の区別を消滅させた実践を契機として、ケージを越えて音楽の範疇から逸脱する方向性を持つものとしての、音楽家を中心とするサウンド・アートの成り立ちが確認された。このようにサウンド・アートの外観を概括し、本論文にて論じるサウンド・アートを、ケージを含む実験音楽家によるあらゆる音素材の音楽化とは異なる、ケージ以降の実験的精神の流れを汲み、環境と音との関わりにおける問題意識を強く表明する音の実践と規定した。

次に本研究の視点を確保するために、西洋芸術音楽領域での「環境」の認識の変遷をたどると共に、環境芸術や環境デザイン分野での環境の認識について考察を行なった。環境という概念は様々な分野で取り入れられ実践を試みられている事項であるが、その認識は分野、個人によって多様で異なっている。しかし現在では、環境が周りを取り囲むような単なる物理的な事象ではなく、人間自身を含むと同時に人間を取り巻き、相互作用を及ぼし合うものとして見た外界であるとの認識に収斂しつつあることが推察された。

第 3 章においては、ポスト・ケージの第 1 世代と認容されるアーティストらの環境に関わるサウンド・アートの思想と実践について検証を行なうことで、その意義と価値を明らかにする。彼らは音を媒体（メディア）として日常環境で作動させることにより、マクルーハンの言う反環境あるいは対抗環境を創出し、環境の理解を促すことによって劇的な身体の拡張によってもたらされる人間の精神的な維持の危機の解消の手段を提供しているのである。

ケージ以降の実験的な音楽の伝統とベイトソンの思索を軸に展開されるデヴィッド・ダンの生態系サウンド・アートは、環境に関わるサウンド・アートの次世代、あるいは転回点として位置づけられる。彼は環境音を再び環境にフィードバックし相互作用が起こる契機とする作品、池の水中という生態系の豊かな音による相互作用の様子を観察する作品、人間が知覚することのできない生物の音を取り出す作品などの人間と人間以外の生命体、環境に関する実践を行ってきた。特にベイトソンが「自然」を精神のモデルとしており、その円環的なシステムを体現するものとしてダンが自身の作品を認識していることが明らかである。また、キクイムシに関する科学者との共同研究において、音がその繁殖を抑え、森林破壊に対する有益な対処法であることを発表している。このような彼の実践に対する考察より、生態系サウンド・アートが芸術的、文化的、さらには地球の問題にまで及ぶ意義深い実践であると考えられる。生態系サウンド・アートはダン以外のアーティストによっても試みられており、筆者が参画した藤枝守の作品の制作についてその過程を追うことで、生態系サウンド・アートの思想や戦略の一例を明示した。

以上のことから、環境に関わるサウンド・アートが、実験音楽の伝統の上にケージに端を発した「聴く」という行為を重視、発展させ、人間の知覚を音を通して再文脈化することに焦点を合わせていることが明らかとなり、生態系サウンド・アートは「自然」をモデルとした世界を一元的に捉えることができる芸術として価値があるという結論に至った。

氏 名 : Takako Otsuka 大塚 姿子

論 文 名 : 環境に関わるサウンド・アートの研究
—ジョン・ケージ以降の思想と実践
A Study of Sound Art related to Environment
: Thought and Practice after John Cage

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

This thesis is the result of my aim to study the acoustical range with the directionality which deviates from the category as "music" in art music after the 20th century, and in particular to focus on integration of sound art in the acoustical and physical environment. A part of this is to look at the cultural and social significance, as well as artistic and other values, of the sound art.

This tries to narrow the focus on attention to the environmental sound and the environment from the practice with the various range as the sound art and run after the appearance and a process of development about the experimental sound practice placed in the genealogy after a Cage of Western art musical history.

By exploring the theory and practice of sound art by artists representing the first generation of the post-Cage era, its significance and value together with its relation to the environment are highlighted. They create an anti-environment or counter-environment according to McLuhan. They makes sound run in the environment daily as a medium, and the canceled means of the crisis of the human mental maintenance brought by expansion of a dramatic body are offered by suggesting understanding of the environment.

Ecological sound art by David Dunn developed by leading with experimental musical tradition after a cage and the thought of Bateson is considered the next generation, or turning point, of sound art related to the environment. He makes use of the sound of organisms that humans cannot perceive, such as non-human life forms. Bateson shows "nature" as a model of spirit in particular, and it's clear that Dunn recognizes his own work as the one which embodies the circle-like system of nature. Furthermore, in collaboration with scientists, his sound affected the bark beetle with the result that breeding was suppressed, which was reported to be a valuable remedy for deforestation. It is an example of ecological sound art being significant for art and culture while also addressing a global problem. The thought and the strategy of ecological sound art were made clear by a writer's running after its process about production of works by Mamoru Fujieda.

From the above, it follows that sound art in our environment has developed from a experimental posture of Cage and experimental music, and sound art emphasizes the act to which Cage says "listening" and makes them develop, and sound artist bringing into focus that

a re-context perceives man through sound. The conclusion is that ecological sound art is a valuable art form that can catch human, non-human life and environment unitarily as modeled after "nature".